

「他者としての日本人とわたし」のご案内

昨年度に引き続き、2020年1月11日（土）にワコールスタディホール京都（京都市南区）にて「くらしと災害フォーラム2019」を開催します。

本フォーラムは3年連続で開催し、昨年度は「女性の直感とまなざし」、今年度は「他者としての日本人とわたし」というテーマとしました。

昨年度のフォーラムでは、堂本暁子さん（男女共同参画と災害・復興ネットワーク代表・前千葉県知事）、岡村美穂子さん（鈴木大拙館名誉館長・日本民藝館評議員）のそれぞれの異なる視点から、女性が抱える問題から災害時に本当に必要な備えとは何かについてお話をしました。そこで、浮かび上がった課題として「共感はできるのに、なぜ連帯できないのか」「また（支援）する側・される側という構図をどのように乗り越えることができるのか」という問いが生まれました。

その問いに対する答えをたどる一視点として、「当事者性の欠如からくる断絶と分断」ではないかと考えました。それは、日本特有の“本音”と“建前”を使い分け、それを美德とする文化的背景からくる二重構造によって、当事者でありながら、自分に覆いかぶさる問題に対して傍観者的にしか対峙できないという弊害であり、それらが日常の不自由さにつながっているのではないのでしょうか。

では、わたしたちはどうすれば当事者になりうることができるのか。また、当事者をもつ困難と受難を受容した先にある「自由」とはなにか。

今年度のフォーラムでは、東日本大震災後、福島に入り原発作業員の実態を世の中に伝えたフォトジャーナリスト小原一真さん。そして、南相馬で精神医療を行う医師の堀有伸さん。発災後、それぞれの目的と信念をもって福島に赴いたおふたりに自らの経験をもとにご講演いただき、ナビゲーターとして末安民生さん（岩手医科大学看護学部教授）をお迎えし、当事者性について、そして、いまの日本で生きる私たちの胸奥にある「何か」について考える時間にしたいと思います。

このような取り組みがくらしや災害にどのような意味をもつのか、また、生きづらさを解消する一助につながるのか、たしかではありませんが、ご参加いただく皆さまと一緒に考えることができればと思っています。皆さまのご参加をこころよりお待ちしております。

About “NPO 法人 Salut” | 女性精神がい者を対象とした共同作業所として精神科医・精神科看護師によって2002年に設立され、2011年に就労継続支援B型事業所へ事業移行しました。開設当初から女性精神障がい者“のみ”を対象とした背景には、性被害や性的虐待に遭遇した結果、精神疾患を患う女性患者が多く、彼女らに共通していたことは自宅や社会に居場所がなく、強い孤立感を抱いていました。その孤立感は彼女らを苦しめるだけでなく、回復の妨げとなっていました。そういった女性らを対象に、医療の場ではなく、安心できる環境で過ごしてもらいたいという思いから京町家を借りて、女性だけという特徴を活かし、活動開始時から「ものづくり」を通じた就労支援を行っています。